校内支援だより

No.3

コミュニケーションの発達について

コミュニケーションの発達は、一つの考え方として、前言語期(0～1 歳)、語彙獲得期(1～2 歳)、幼児期(2～6歳)、学童期(6～12 歳)に分けられます。今回は前言語期の発達について紹介します。この時期はコミュニケーションの土台を形成する大切な時期であり、本校の児童生徒でもこの時期の課題につまづきを抱えている子どもたちがいます。

【前言語期の発達】

生まれてから初めての言葉が出るまでの0～1歳までの時期で「言葉の準備をする時期」です。この時期の周囲の関わりがその後のコミュニケーションの発達に大きく影響してきます。

○コミュニケーション行動の発達

乳児は生まれてすぐから反射によって生じる生理的微笑がありますが、3か月ごろになると養育者からの声かけや抱っこの際にみせる社会的微笑がみられるようになります。この時期になると、「お母さん」「哺乳瓶」など意味のある対象を目にすると、そこからイメージする出来事が思い起こされるようになります。

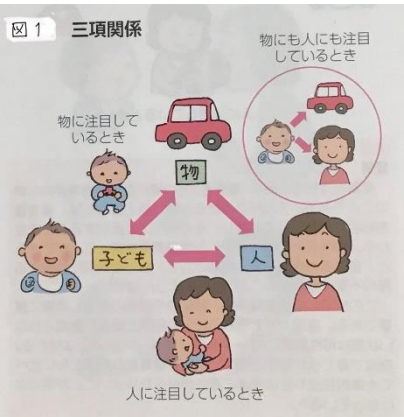
○共同注意の発達

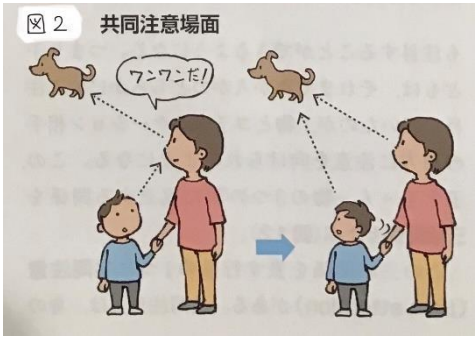
3か月ごろの乳児は、物や人に対する関心を高めていきますが、人を見たり、物を見たりと視点を転換することはほとんどありません。「子ども⟺物」「子ども⟺人」との間で関係が成立し、これを「二項関係」といいます。

それが 9 か月ごろになると物と人との両方に注意が向けられるようになります。これを「三項関係」といいます(図1)。この三項関係が成立するようになると、物を取ってほしいときに人を見て要求したり、他者と興味や関心を共有したりする(共同注意)ことができるようになります(図2)。共同注意が成立するようになると、子どもが興味を示した物に対して大人が名前を言ったり、大人が注目している物に子どもが注目したときに大人が名前を言ったりすることで対象物と名前を結びつけ、語彙を習得していきます。

10～12 か月になると指さしができるようになり、他者に対して意図が通じやすい手段で共感や要求といった意図を伝えることができるようになります。

指さし以外にも視線、身振り、発声、声の抑揚など前言語期の子どもが用いるコミュニケーション手段は豊富にあります。ただし、これらの方法が伝達手段として機能するには、子どもの意図を推測し、適切に反応する大人の存在が必要不可欠です。子どもの発するサインに気づき、その意味を解釈し応答する大人側の感受性が大切です。





○発声行動・言語音知覚の発達

言語を聞き取って理解し、声に出して話をするためには、コミュニケーション能力だけでなく、聞く力および話す力の発達が必要です。

話す力の発達

色々な音を発音するためには発声発語器官と呼ばれる口唇、舌、軟口蓋、咽頭、喉頭などの発達が必要です。これらの発声発語器官の発達が未熟であると、滑らかに発音することが難しくなります(図3)。

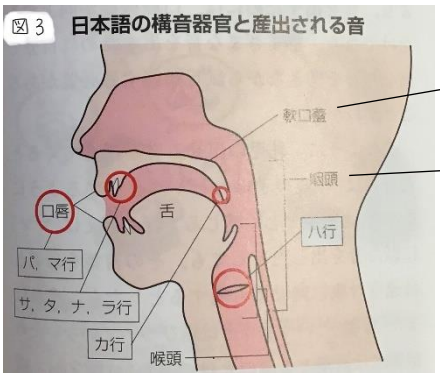
2～4か月ごろになると、大人とのやりとりの中で「あっあっ」「あうー」などクーイングとよばれる舌や唇を使用しない母音の発声ができるようになります。

4～6 か月になると、色々な高さや長さの音を出し、それを自分で聞くという遊びをするようになり、言葉を話す練習をするようになります。

6 か月を過ぎると、「バババ」「ダダダ」のように「子音＋母音」の構造をもった喃語がみられるようになります。この喃語も、「バババ」のように同じ音の反復から「ダクジュ」のように複数の音が組み合わさる喃語へと発展していきます。聴覚障がいの子どもは喃語の発展が難しいといわれており、音を出すためには自分で出した音を聞きながら試行錯誤する必要があると思われます。

10 か月ごろになると、多様な喃語が連なり、まるでおしゃべりをしているかのような発話がみられるようになります。また、自分独自の音のパターンで意味を伝えようとする(ご飯のことを「ドンド」というなど)がみられるようになります。

口は話すだけでなく、食べるための器官でもあります。そのため、食事面での口腔機能の発達が発音にも大きく影響してきます。



軟口蓋

咽頭

聞く力の発達

子どもが言葉を理解できるようになるためには、話す力に加えて聞く力の発達が必要です。言葉を理解するためには、周囲の発話の中から単語を切り出すことが必要です。音は切れ目なく繋がっているのでどこまでが1つの単語か理解することは難しいです。例えば「ミルク」という単語は子どもにとって日常的に耳にする言葉です。「ミルクのむ？」「ミルクおいしいね」など繰り返し聞くことで「ミルク」という単語を理解するようになります。前言語期の子どもは話しかけても反応が得られないように感じるかもしれませんが、子どもは周囲の言葉を何度も聞きながら繰り返し出てくる単語がないか探索しているので、丁寧にじっくり話しかけることは大切です。

○認知機能の発達

言語発達と認知機能の発達は密接に関連しています。乳幼児の場合、認知発達は遊びの様子から推測することができます。

感覚運動あそびを繰り返す中で、例えばガラガラを振る→音がするといった因果関係を理解するようになります。このような因果関係の理解はコミュニケーションの発達とも関連しています。手を伸ばす→抱っこしてくれるなどのように自分の行動が他者に影響を与えることを理解することで、さまざまな手段で自分の意図を相手に伝えられるようになります。これは三項関係とも密接な関係があり、「誰に、何を、どうしてほしい」といった思考にも繋がっていきます。

８ か月ごろになると、目の前から対象物が見えなくなってもそこに存在し続けることを認識できる(物の永続性)ようになります。これは見えなくなってもそのイメージを頭の中に保持していることを示し、このイメージする力は、この後の言葉の発達に繋がっていきます。

身近にあるものを何でも口に入れたり、投げたりしていた子どもは ０ 歳後半になると、靴を足へ持っていく、帽子を頭に持っていくなど物の性質に合わせた操作をするようになります(機能的操作)。機能的操作が可能になった子どもは、「靴」「帽子」という言葉は理解していなくても、その概念は理解していると考えられます。これがこの後の言語発達の基盤となり、「ポイしてきてね」→箱におもちゃを片付けるなど言葉に伴うわかる動きが増えていきます。

子どもは楽しさを感じると何度でも繰り返し遊ぶので、感覚運動的知能の発達を促進するには、子どもが楽しいと感じるあそびを繰り返すことが重要です。大人がさせたいことを強制するのではなく、子どもが楽しいと感じられる遊びができる環境を用意することや子どもが飽きるまで遊びに付き合うことが大切です。

参考文献：言語学・言語発達学(メジカルビュー社)
絵で見る ことばと思考の発達(ジーアス教育新社)